

傷ついた魔女は自分を切りつけた

星空の旅人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

粗暴イレ×ほうきの小説です。

内容が歪みまくっている上に暴力描写も結構ありますのでお気を付けください。

第
1
話

目

次

1

第1話

私の目の前に座る、私にそつくりな彼女はくすりと笑いました、以前の私のような長い髪を靡かせて。

それは侮辱するような、小馬鹿にするような、無力な魔女を嘲るような笑いでした。

何も出来ない癖に斜に構えて、達観したつもりになつて自分の姿はあまりにも憎たらしくて、私は気づかぬうちにナイフを握つてしまつていました。

私の握られたナイフを見て、彼女は挑発するような言葉を吐きました。

「ふふ、そんなに刺したければ刺したらどうですか？」

ですが私はその挑発に乗ることはしませんでした。

正直言つてしまえば、なぜ挑発を我慢出来ていたのかはわかりません。

この時の私は頭が真っ白になるくらいに怒り狂っていました。

けれど我慢出来ていたのは、きつとここで挑発に乗つてしまつたら私の中の何かが壊れてしまうと理性が歯止めをかけてくれていたのでしよう。

けれど、その理性の枷は無意味に終わってしまうことになりました。

「もしかして今回も動けないんですか？ 魔女の癖して誰も救えない役立たずのイレイナさん？」

「ふつ———ざけないでくださいっ！」

そして気づけば、私は――

朝日の差し込むキッチンに立ったわたくしは、ぐつぐつと煮え立つシチューを一掬いし、口に含みました。

「ふむ、なかなか悪くない出来でござりますね」

わたくしは、未だ寝室で眠るイレイナさまの朝食を作つている最中

なのでバージーいました。

あの国——時計協ロストルフを訪れて以降、イレイナさまはすつかり全てに對しての活力を失ってしまい、切られてしまつた髪を戻すこともしなければ、朝食の用意ですらわたくしに任せっぱなしなのです。

今のイレイナさまは好きだつたパンにすら興味を示さず、旅すらも惰性と化しています。

それでも辛うじて旅を続けているのも噂に聞いた『あなたの願いを叶える国』という物を目指しているからに過ぎません、その国に辿り着けば、きっと苦しみから解放されると信じているのでしょうか。

……本当にイレイナさまは変わつてしまわれました、以前のイレイナさまは旅に目的を見出することはせず、ただあてどなくのらりくらりと旅をしてらつしやつたはずなのに。

とはいって、だからといってわたくしのイレイナさまへの気持ちに一切の曇りなどありません、イレイナさまが傷の痛みに動けないものであればそれが治るまで看病するのもやぶさかではありません。

いえ……素直な言い方ではございませんね、こうやつて四六時中世話を焼かせていただけるのはむしろ嬉しいくらいでなのでござります、持ち主にこれだけ必要としてもらえるわたくしは幸せ物です。

わたくしが朝食の付け合わせのパンをナイフで切つていると、突然にイレイナさまの悲鳴が響きました。

その声にわたくしはいてもたつてもいられず、キッチンを飛び出して寝室に向かいました。

「ごめんなさいごめんなさい……私は誰も救えなかつた……エスティルさん……」

イレイナさまは部屋に入つて来たわたくしに目をやる」ともなく、
ただ延々と独白を口にします。

ロストルフに住もう魔女への懲悔の言葉を、救えなかつた後悔の言葉を。

あの事件を激しく後悔しているイレイナさまは今でもあの時の事を夢に見ることがあるらしく、夢に見た日はこうなつてしまふのです。

そしてこうなつたイレイナさまはざつと同じことを呴くばかりで、食事も碌にとろうとしなくなつてしまふ。

なんとかイレイナさまを幻想から引き戻すべく、震えるイレイナさまを抱きしめ必死に呼びかけます。

「イレイナさま！ あれは仕方が無かつたことでござります！ イレイナさまが気に病むことはございません！」

「エステルさん。やめてください、駄目です。こんな――」

しかし状況は悪化するばかり、イレイナさまはあの時の光景を幻視して存在しないエステルさんに手を伸ばしております。

このまま戻つてこれなくなつてしまふのではないか、そんな焦燥に襲われたわたくしはどうにかするべく、虚空を見るイレイナさまの目を覗き込み必死に呼びかけました。

「イレイナさま、だめです！ それ以上行つてはいけません！ イレイナさま！ わたくしの目を見てください！」

呼びかけの甲斐あつてかイレイナさまの瞳孔が揺れ、わたくしの目を見てくださいました。

「ほう……き……さん？ あれ……私は……」

「イレイナさま……よかつた」

しかし安心するのも束の間、途端にわたくしの瞳を覗くイレイナさまの目の色が変わつたのです。

「ああああ！ あなたのせいで！ あああつ！」

突然に怒りを滲ませるイレイナさま。

最初は何をおつしやつているのかわかりませんでした、あなたのせいでと言われましても、わたくしには何かをした覚えはございませんでしたから。

けれど程なくしてイレイナさんが何をおつしやつてているのか理解

できました、どうやらイレイナさまは自分自身に、より正確に表すの
であればわたくしの瞳に映つてしまつた自分自身という存在に怒り
を抱いているのでしよう。

「あああっ！ その顔がっ、私を苦しめるんですっ！」

イレイナさまはベットの上に落ちていたナイフを取ると自分自身
の顔に突き立てようとします、わたくしが慌てて持ってきてしまつて
いたものです。

「待つてくださいませっ！ イレイナさま、それだけは！」

イレイナさまが自分自身を傷つけるのは見ていられません、ですか
らわたくしはイレイナさまの手首を掴んで阻止を試みます。

「止めないでくださいほうきさんっ！ 私は私を許せないんですっ
！」

けれどイレイナさまも強情で、決してあきらめようといったしませ
ん。

「イレイナさま！ どうか思い直してくださいませ！」

それからしばらくもみあいを続けた末、なんとかイレイナさまのナ
イフを降ろさせることに成功いたしました、しかし、だからといって
何か解決したわけではございません。

「はあ……はあ……ほうきさん……なんで止めるんですか……」

「はっ、はあ……イレイナさまが自分自身を傷つけるのなんてみたく
ありませんから」

「……じゃあこの怒りを誰にぶつければいいんですか！ 私は自分が
憎くて堪らないんですよ！」

「……なら、わたくしにぶつけてくださいませ。わたくしはイレイナ
さまの全てを受け入れますから」

「出来る訳ないじゃないですか！ ほうきさんは私の大事な人なんで
すから！」

「……わかりました、ならばわたくしでなければよいのですね？」

わたくしの言葉にきよとんとするイレイナさま、わたくしはベット
の横に置いてあつた杖を取つてイレイナさまに渡して、耳打ちしまし
た。

「わたくしに魔法をかけてくださいませ——」

それから数秒後、ベットの上には長い髪をしたイレイナさまが座つておりました。

そして、短髪のイレイナさまがナイフを片手にそれを見下ろしていました。

とはいえ、もちろんイレイナさまが一人いるのではございません、わたくしがイレイナさまに髪の色を変える魔法をかけて貰つたのです。

わたくしは髪の色以外は元々そつくりですから、髪の色さえ変えてしまえばわたくしはイレイナさまになつてしまえるのです。

今わたくしだつたらイレイナさまの鬱憤を受け止める事も叶うはずです。

ですがイレイナさまは未だに躊躇があるのか、恐ろし気な表情でわたくしを見下ろしつつも手を出せていません。

けれどもナイフを握る手が震えているのを見るに、効果は間違いくあるのでしよう。

ですから、最後の一押しをすることにしました。

「ふふ、そんなに刺したければ刺したらどうですか？」

その言葉にイレイナさまの肩が震えました、息も荒くなっています。

態度を見るに明らかに挑発は効いているようございました、ならばと、決定的な一言を放り込むのでした。

それでイレイナさまが楽になつてくれるのであれば、安い物でござります。

「ふふ、そんなに刺したければ刺したらどうですか？ 魔女の癖して誰も救えない役立たずのイレイナさん？」

「ふつ——ざけないでください一つ！」

その言葉を口にした途端、言葉に出来ない感覚が腹部に走りました。

眼前には目の据わったイレイナさま、手には真つ赤に血濡れたナイフ。

その刃の先を追つて見れば、それはわたくしの右脇腹に突き立ち、真つ赤な血を啜つておりました。

「あつ……かはつ」

「あなたが！　あなたが！　何も出来ないあなたは死ねばいいんです！」

氣づくと同時に気が狂つてしまいそうな激痛が走り、痛々しい圧迫感が込み上がつてきました。

「ああ……うぐつう、痛いつ……あ、つく……」

人の姿を得て初めて味わった感覚にわたくしは耐えきれず、痛みにうめき声を漏らしてしまいます。

イレイナさまをそんなわたくしを見下ろし、笑みを浮かべました。きつとイレイナさまそつくりのわたくしが、顔を痛みに歪ませ苦痛に満ちた声をあげているのがそれ以上ない程に快感なのでしょう。「ははは、はははははは！　痛いですか？　ねえ！　痛いですか！」イレイナさまはナイフをしっかりと握り、更に奥に押し込みました。

途端に体を突き抜ける電撃のような痛み、何かが体の奥に侵入する感覚、炎に焼かれたように痛みがじわじわと、けれども激しく主張します。

その腹部がちぎられてしまつたかのような痛みに悲鳴を我慢することなど到底不可能でございました。

「あああああつつつ！！　ぐつ……あつ、いたいつ、いたいつ！　あうつ、うううううつ！！」

「はははははははははは！　これがエステルさんの痛みなんですよ！　何もせずに見ているだけだつたあなたにはわからないでしようけど！」

イレイナさまはナイフから手を離すと、杖を手に取つて挑発するような声で、

「ねえ、叫んでないで顔をあげてくださいよ」

わたくしは血が止まらない右脇腹を抑えつつ、イレイナさまの声に従い顔をあげました。

するとイレイナさまわたくしに向かって杖を向けておられました。

「その顔が不愉快です、死んでください」

わたくしの顔を凄まじい衝撃が襲いました、どうやら光弾のような物をぶつけられたようでございます。

吹き飛ばされる形でわたくしは壁に頭を打ち、視界に血が滲みました。

どうやら頭皮を切つてしまつたようでございます、顔の表面を血が伝う感覚と共にローブの胸元が赤く染まつてゆきます。

イレイナさまは動けなくなつたわたくしの髪の毛を掴むと、それを無理やり引つ張つて顔をあげさせ、笑いました。

「へえ、これくらいで動けなくなつちゃうんですか？ 少なくともセレナさんは同じことをされて笑つていましたよ？ あなたも笑つてみてくださいよ」

私はイレイナさまの望みを叶えるべく笑おうとします、ですが喉から出る声は意思に反してうめき声にしかなりません。

先程頭を打つてしまつた影響でしょうか、意識が朦朧になつていたのでござります。

「あ、あああ……ああう」

呻く事しかできないわたくしにイレイナさまは声を荒げて、思いの丈をぶつけられました。

「ねえ、笑つてくださいよ！ エステルさんは刺されても戦い続けていましたしセレナさんは笑つてたんですよ!! なのになんであなたは何もされてないのに笑う事も怒ることも動くことすら出来なかつたんですか！ ふざけないでください！」

きっとそれはイレイナさまの抱える痛みそのものだつたのでよう、イレイナさまはどんなに言葉にしても收まらない激昂と共にわたくしをベットから叩き落しました。

床に打ち付けられて息が詰まるとき同時に、刺さりっぱなしだつたナイフがより深く刺さつてから床に転がりました。

その痛みは言葉に出来ない程のものでございました、そのあまりに痛みにわたくしは、ナイフという栓が抜けて形成された血の池の中心で絶叫してしまいました。

しかし呼吸が上手くいっていないせいでそれは殆ど声にならなかつたようで、喉から出るのは擦れた声だけでございました。

「あつく……つ！ かつ……あつ……ぐうううつ！ ジホツ……」

「あなたが不愉快なんですよっ！ のうのうと暮らすばかりで何も出来なかつたあなたが！」

イレイナさまは左の脇腹の傷口を蹴り上げました、わたくし雷に打たれたかのような痛みに床をのたうち回ります。

「あがつ！ あああつ！ ぐうあああつ！」

のたうち回るわたくしを次に襲つたのは顔への痛み、イレイナさまはわたくしの顔を踏みつけたのでした。

そして腹部に思いつきり踵を叩きつけたのでござります。

「うぎつ、ああああ!! うううううううう！」

「あなたにはわからないでしよう！ あの国で誰一人として救えなかつた私の無力感が！」

イレイナさまの怒りを乗せた蹴りが、床に寝転がるわたくしの後頭部を直撃しました。

頭に衝撃をくらつてしまつたからでしようか、この時に意識が曖昧になつてしまつたのを覚えております。

どんどん意識が曖昧になり始めたわたくしとは対照的にイレイナさまの怒りはより明確な物になり始めたようで、意識が沈みつつあるわたくしに馬乗りになつて怒号と共にわたくしに拳を振り上げるのでござります。

「達観したつもりになつて澄まして旅をしているあなたは知らないでしよう！ 目の前で愛情が憎悪に変わる瞬間を！」

言葉と共にイレイナさまの拳が右頬を打ちました、嫌な音と共に硬い感触が口の中を跳ね、血の味が口内を埋め尽くします。

「誰かが、ついさつきまで愛しいと感じていた人間に殺意を向ける瞬間を！」

その次には左頬に痛みの感覚、こちらもまた嫌な音が聞こえた気がしますがわたくしはよく憶えておりません。

この時既に意識が消えかかっていたわたくしは、ただ殴り続けるイレイナさまに対して呻きを返す人形と化していたものですから。

「あつぐつ！ うぐぐぐああああ！ うぐつ、あつ！ あぐつ！！」

イレイナさまはそんなわたくしの反応を楽しんでいるようで、突然に高笑いをあげてもおかしくない程に口角を吊り上げて、ただ一心不乱に拳を振り上げておられます。

「ねえ！ ほら！ ねえ！ 何か反論してくださいよ！ 役立たずのイレイナさん！」

「ぐうつ、あつく！ ぐぎつ！ ああうああう!! 『ほつ、ああつく！』

わたくしが痛みを享受していると、ふと、拳が止まりました。

不思議に思つたわたくしは覚束ない意識でイレイナさまを見やります。

するとイレイナさまは静かにわたくしの首元に指を這わせておりました、そして何をするかは考えるまでもありませんでした。

「何も出来ない私なんていりません、もうあなたのことを見たくありません。ですから」

イレイナさまの細い腕がわたくしの首の根を掴み、イレイナさまは歪んだ笑いを浮かべました。

「死んでもください」

それは今までに無い苦しみでした、痛みで言えば殴られていた時と比べるべくも「ございませんが、それとは違う苦しみがあるのでございます。

明確に自らの命が失われていく恐怖と言えばいいのでしょうか、息苦しい閉塞感と暗くなつていく視界は明確に死を宣告しているようであまりに苦しかったのでございました。

「ぐつ……あつ……！ 『ほつ……かつはつ、『ほ……ぐつ……うえ……！』

「良い顔ですね！ もつと苦しんでもつと苦しんでそのまま死ん

じゃつてくださいよ！」

ですが、一方でわたくしの心は喜びに弾んですらおりました。

なぜならイレイナさまが楽しそうだからです、顔に浮かべたのは歪んだ笑みではありますが、ここまで心地よさそうなイレイナさまは久しぶりなのでした。

きつとこのわたくしの苦しみはイレイナさまの苦しみそのものなのです、だからわたくしが苦しんでいる分イレイナさまは気が晴れて樂になるはずでござります。

実際、イレイナさまはわたくしが苦しめば苦しむほど、樂しそうに笑つておられます。

こんな形でわたくしが苦しみを引き受けられるのであれば、いくらでも引き受けましよう、それで死んでしまつたとしてもイレイナさまが樂になつてくれるのであれば構いません。

そんな風にぼんやりと考えていると、一層イレイナさまの手に力が込められました。

どうやら、そろそろ終わらせるつもりのようです。実際わたくしの体も限界のようで既に視界は殆ど見えなくなりつつありました。

「さようなら、イレイナさん。のうのうと生きていたあなたにはお似合いの結末ですね」

イレイナさまは心地よさそうに笑いました、その苦しみから解き放たれた清々しい表情はわたくしの記憶の最後を鮮烈に飾ることになつたのでした。

「——さん！——ほう——ん！——ほ——さん！

暗闇の中、誰かの声が聞こえました。

「——ほう——さん！ ほうきさん！」

それはわたくしを呼ぶ声だつたのです、わたくしはそれに釣られて瞼をあげました。

まず最初に目に入ったのは涙を限界まで貯めた瞳、その次に震える唇、今にも泣きそうな

イレイナさまがわたくしを見下ろしていたのです。

「イレイナさま……？」

わたくしが返事を返すと、イレイナさまは涙をこぼしてわたくしを抱きしめました。

「ほうきさん！　ほうきさんっ！　ほうきつ……さんっ！」

わたくしを抱きしめたイレイナさまの体は震えていて、わたくしを呼ぶ声は縋るようですらあります。

わたくしはあまりに弱ってしまったイレイナさまを慰めるように優しく抱きしめ返しました。

「はい、あなたのほうきでございます。ところで、どうして泣いておられるのですか？」

「だつて、だつて！　私はほうきさんに酷い事をつ……！」

その言葉でわたくしは現在の状況を思い出しました、わたくしはイレイナさまのふりをしてイレイナさまの怒りや鬱憤を引き受けたのです。

そして死んでしまった……はずでしたが、こうやって抱きしめているイレイナさまの体温はあまりにも現実感に溢れておりまし、体の何処にも痛みはございません。

髪の色が元に戻つてしまつていてることを考えるに、きっとわたくしが意識を失つた後に魔法が解け、イレイナさまは痛めつけている相手が自分のうつしみではなく、わたくしであるということを思い出し、正気を取り戻して治療した——きつとそんな顛末なのでしょう。

「ごめんなさい……ほうきさんっ……ごめんなさいっ！」

「いいのですよ、イレイナさま。わたくしはイレイナさまの道具でございます、どんな形であれイレイナさまに必要とされるのならばそれが幸せでござります」

イレイナさまは肩を震わせ、涙交じりの声で感情を口にしました。「私はもう、私が嫌いです……誰も救えず、ほうきさん今まで手を出してしまつて」

「いいんです、いいのです……イレイナさまが救われるのなら」

わたくしは赤子にするようにイレイナさまの背中を優しくなでな

がら、慰めます。

「やつぱり私、自分を殺したいです……今すぐにでも。セレナさんに
も、エスティルさんにも、ほうきさんにも贖罪しなければいけません」
「いいえ、あなたは悪くありません。それでももし、悪いと思うのであ
れば」

わたくしはベットに転がっていた杖を取り、イレイナさまに握らせ、同じく転がっていたナイフの柄にイレイナさまの手を重ねました。

「いくらでもわたくしにぶつけてくださいませ、自分自身への怒りを、
わたくしを傷つけてしまった悲しみを。わたくしは全て、全て受け止めますから」